

始

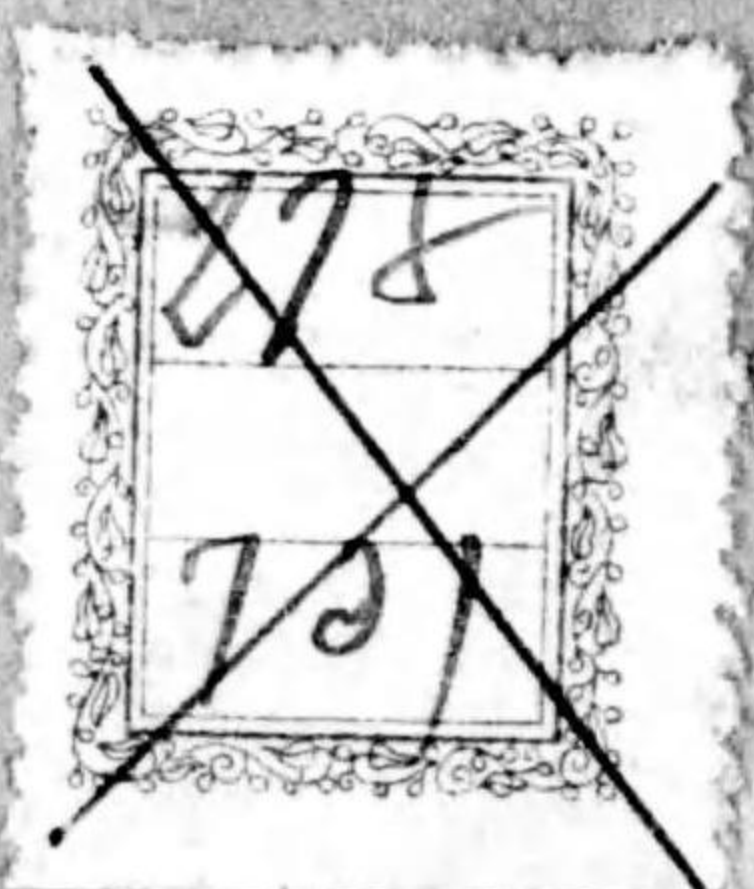


特 101

566

詠

草





特101  
566

—(1)—

端書

我妻、此年七月十五日、身まかりけるが、長  
 たつきにて、種々の介抱見舞など、心盡しの  
 りもなき、慈愛の友刀自、知る邊の人々より、  
 りとも記念のものを願てよと望まるゝ忝けな  
 さ。否まんよしもなけれど、さりとして、平生衣服  
 調度に乏しき身の、數多き方々へ分たんものと  
 てもなし。況してや、五七年來は貧道に親み、明け  
 暮れ、物も思ひも底打拂ひ、去年の衣なき半貧は、

正限  
 大  
 5. 9. 18  
 内交



今年は中身迄もなき全貧となりぬれば、身まかりし後に、何の残るべきや。されば我も途方にくれ、何もがなと、筐の底、棚の隅、をちこち探りて、漸く捜しあてたるは、故紙にひとしき舊稿なり。披き見れば、十年も以前にものせし腰折れなりき。人さまに贈るほどの値なきものなれど、さりとして、外にせんかたなければ、すこし許り事の由を辨じて、贈ることゝしぬ。

妻の、歌よむ業を學びたるは、十二三年の昔、齡三十にみたざる頃ほひなり。或時、天満宮の御歌と

申傳ふる

心たにまことの道に叶ひなは

祈らすとても神や守らん

との歌に感激し、何としても、己が心をまことの道に叶へんと、朝夕思ひを凝せば、凝すほど、心中湧くが如くに、種々雑多の念競ひ起る。之れではならず、何としようと思ひ返せば、又念々續き起りて、暫くも止む時なく、いづれが己れの眞心やら、さだかならねば、眞の道に叶はしめんやうもなし。況してや、惡しゝと知れる心も、事に觸れ物



にあたりて、起りやすし。之はしたり、今迄は氣にもとめざりしが、今は思ひ當れり。生れ來て長き月日の間、いつともなく、萬づの物事に、心とまりて、染み汚れたる爲めなるべし。斯くてはならず、和歌は、神代より、言の葉に眞をのべ、神もしろし召れしものと聞く。己れが此度の心付きも神歌の賜ものなれ、いざ之れよりは文の林に尋ね入り、心のけがれを拂ひ清めて、眞の道を尋ねんと、願ひの心を發し、二年あまり、師を求めて和歌を學びけるが。或時、予に問ふて云く、己れの拙き故

ならんも、古の和歌はいざ知らず、今己れの學ぶ和歌は、言葉の道にて、心の法とは思はれず。あはれ、眞の道に叶はんやうの、心の法はいかならん、示し賜へと。予云く、一心是萬法、萬法是一心なれば、何か心の法にあらざるもの有るべき。さはさりながら、是心法最上段の事なり、學道初心の者の知るべきやうもなからん。孟子は、學問之道無<sub>レ</sub>他。求<sub>ル</sub>其放心<sub>ニ</sub>而已矣と云ひ、外に放るゝ心を、取押へて持つが、學問の道なりと。三十一文字の和歌も、放れ易き心の駒を、つなぎとむる手綱ともな



り、人世の旅の杖ともなりて、影の形に添ふ如く、心が己れにありて放れざれば、一心不亂にして、外に心を取らるゝことあらず。並人の心は、持て己れにあるか、放れて外にあるか、二途のほかにはあらず、常に持て放失せざるは、修養なくして能はざる所なり。古往今來、幾千萬人、未だ善事の善たるを知らざる者なくして、善事を行ふ者の多からざるは、之が爲めなり。心己れを放れ、物に著きて返らざるを、妄心と云ふ。妄心生ずるときは眞心隠れ、主客顛倒して、事々物々、逆思倒行、自

ら苦み人を苦しむ。佛家は之を依草附木の精靈と云ふ。之は是、學不學の故にあらず、智愚の故にもあらず。往昔、白樂天は、曾て郡主たりし時、鳥窠禪師の、松枝上に棲居するを見て、問曰。禪師、住所甚危険。師曰。太守、危険尤甚。白曰。弟子、位鎮江山、何險之有。師曰。薪火相交、識性不停、得非險乎。又問。如何是佛法大意。師曰。諸惡莫作、衆善奉行。白曰。三歲孩兒也、解恁麼道。師曰。三歲孩兒、雖道得、八十老人行不得。自作禮而退。白樂天の賢と學とを以て、問端力らなく、禪師の截斷に遭ふて、屈下するに



到りたるは何の故ぞ。初問の時に於て、心己れに在らず、松枝の棲居にありたる爲めと見ることを得ん。放心を求むること、容易ならざるを知るべし。是はこれ、卿が尋ぬる心法の初段なりと。其後、妻は歌詠むこともせで、工風に餘念もなく、日を過しけるが、一日亦問ふて云く、放心を求むることは、修養し得たりと思ふも、心を引締めて、餘所へやらずと、意を用ひるは安心ならず、心苦し、一層上段の心法を示し賜へと。予云く、放心を求むることは、我法より見れば、實に初心一旦の心

法なり。心を引締むれば、我身にとられ、固著して不自由なり。故に此段に止れば、初學に終る。最上の心法は、放心なり。併し放心の時に、物あり意あらば、直に退轉して、心は物や意に止まり、元の空阿彌なり。何にもなき所に放せば、心に止まる所なく、心内に不有、外に不有、中間に不有、一切に徧満し、用ひて有らざる所なく、活潑々地、自在自由なり。猶ほ虚空は本來一物なきが故に、森羅萬象を容れ、求めて有らざる物なきが如し。此事を明むるを、心法悟道と云ひ、明かなるを、神とも佛と



も云ふ。實に最上の段也。然れども、上下初終などの分際は、學者進修の途路のみ。心法には何の隔りあることなく、一切に徧滿して、到らざる所、足らざる所なし。所々に圓成し、人々に具足す。故に誰人と雖も、努て明らめ得ざる者あるべきや。明師に逢ひて質し、工風功を積み、自家心上の珍寶を開發すべきのみ。珍寶一度手に入らば、何の心か、眞の道に叶はざるあらんや。今予の斯く云ふは、心法を解説する言葉なるのみ。心法の眞所は自ら知るの外なし。古歌に

心たにまことの道を得るならば

守らすとても神は身にあり

其後、妻は禪門に入り、朝暮修行し、遂に自ら足りて、求むることなく、順境逆境ともに安住して、星月を送りて果てければ、詠みたる歌とてもなし。こゝに輯むるは、十年以前の舊夢にて、予の端書は、夢上更に新夢を添ふ。笑ふに耐へたり、失錢遭罪なることを。

大正五年孟夏日



中館やう子刀自遺詠百首を選ひ申して

天 舟 生

さきのこす言葉の花はちりもせて

君なきあとのなかめなるらむ

詠 草

中館やう子

一 若 水

初日かけ光のそけき山の井に

誰かくむらむけさの若水

二 戦時新年

西の海は浪風たちてひんかしの

山静なる初日かけかな



三 早鶯

梅もまたほころひかぬる我庭に

はやめつらしき鶯のこゑ

四 竹間鶯

おしなれてなく聲うれし去年の春

植しをさゝにきゐるうくひす

五 移植梅

垣根よりうつしうゑられうれしとや

軒端の梅も春にほゝゑむ

六 野若草

おなし色に野邊の若草生ひ出ぬ

いつれかまさる花やさくらむ

七 柳

うるはしきみとりの色を春風に

まかせてなひく青柳の糸

八 故郷柳

ふるさとのふる木の柳年ふりて

なほ春毎に若みとりする



九 霞

ちかき野にすみれつむ日や來るらむ

遠山里にかすみたなひく

一〇 野遊

野に山に春のあそひのうれしさは

霞の袖につゝまれもせず

一一 花似雪

さむしともおもはて人の眺むらむ

梢に匂ふ花のしら雪

一二 尋山花

我知らず奥山ふかく入りにけり

花より花とたつねゆくまに

一三 山家春

ゐなからに花をもなかめ鳥もきく

山家すまゐそ春はたのしき

一四 月前花

眞盛りの花に光をゆつりつゝ

おほろに匂ふ月のかけかな



一五 折花

みとめては近つきぬれと折花の

枝にこゝろのまよひぬるかな

一六 山路花

賤の女かみたれし髪も匂ふなり

山路の花や折りてかさせる

一七 花宿

さくらさく山の木かけにやとかれは

夢のうちさへ花の香そする

一八 夜春雨

玉さゝのたま／＼露をはらはすは

ふるともわかし夜半の春雨

一九 夜春雨

しめやかに軒端の梅もかをり来て

かりねしつかに春雨のふる

二〇 春日病臥

長閑なる春の光をよそにして

野山あそびを夢にのみみる



二一 湖上春月

滋賀の海今宵は波も匂ふらむ

花よりいつる春の夜の月

二二 江春月

いひしらぬなかめなりけりおほる夜の

入江にうかふ春のよの月

二三 海邊松

君か代の千代の春をやしらふらむ

音も高師の濱の松風

二四 鶴

長閑にも舞ふあしたつの聲すなり

風静なる三保の松原

二五 土筆

われのみと思ふ野末に音するは

誰か先に來て土筆つむらむ

二六 惜花

いろあせて櫻の花のちりゆくは

春もうつろふしるしなるらむ



二七 落花

花に為ふ人のこゝろをさまさむと

風をもまたて櫻ちるらむ

二八 惜春

あかぬまに花をちらしてつれなくも

暮れゆく春をなとをしむらむ

二九 垣根卯花

うつきさく片山里の小柴垣

よそめにみるもあはれなりけり

三〇 朝早苗

朝風にかろくも露をはらふなり

きのふ植にし小田の若苗

三一 若葉

あかぬまにちりにし花のあとみれば

若葉も匂ふこゝちこそすれ

三二 待時鳥

今宵はとねひらてまちし時鳥

またきかぬまに鶏のなく



三三 里郭公

里人か待つる甲斐も有明の

月にひと聲なくほととぎす

三四 旅郭公

いそかさる旅にしあれはくるゝとも

まちてきかまし山時鳥

三五 旅中梅雨

家居する人はしらしなさまたれの

かゝる旅ねのつらき思を

三六 松上藤

榮え行く大内山の若松に

千代をちきりて藤の花さく

三七 池邊藤

風ふけは藤の花なみたちさわき

池の鏡のかけもみたるゝ

三八 雨中蛙

はけしくもふりくる雨にきほひつゝ

聲かしましく蛙なくなり



三九 朝瞿麥

おきそふる露重けにもみゆるかな

あしたの庭のとなつのはな

四〇 牡丹

おかみとりしけれ庭に紅の

色おかみくさ咲き出にけり

四一 岡夏草

秣刈る男子の笠も見えぬまで

岡の夏草生ひ茂りけり

四二 夏月

雨はれて若葉にのこる白露に

かけもすゝしく月はやとれり

四三 水邊螢

露ときえ玉とみたれて川はたに

ひかりすゝしくとおほたるかな

四四 窓螢

雨はれて月まつ窓のをさゝより

ひかる螢のかけのすゝしさ



四五 虹

久方の天つ乙女や通ふらん

雲にわたせる虹のかけはし

四六 池水

こゝちよく底にあそへるうるくつの

かす見ゆるまてすめる池水

四七 瀧

もつるゝもとくるもはやし奥山の

岩間にかゝる瀧の白糸

四八 松下泉

さらぬたにあつさを知らぬ松かけに

音もすゝしくわく泉かな

四九 夕顔

やり水にひるのあつさもなかれゆく

軒端に匂ふ夕顔のはな

五〇 船納涼

夕まくれ蘆の葉風にまかせたる

舟の中こそすゝしかりけれ



五一 蓮

朝なく露のしらたまおきかへて

涼しく見ゆる池のはちす葉

五二 朝顔

さまくの色には咲けと朝顔の

露のひぬまをたのむはかなさ

五三 野藤袴

あれはてし野中に匂ふ藤袴

ほころひたれと見る人もなし

五四 野薄

宮城野の廣野の末を花すゝき

我ものかほに咲き亂れけり

五五 月前薄

人とはぬ荒野を照らす月かけに

さひしくたてる花すゝきかな

五六 観月

まちわひて今宵はこそと見る月に

雲なかりそ夜はふくるとも



五七 閑居水鶏

都人とひきし折は音もせて

何を水鶏の今たゞくらむ

五八 月前水鶏

手枕の夢を水鶏にさまされて

見るもうれしき窓の月かけ

五九 閑庭蟲

殊更につくらぬ庭そおもしろき

都にきかぬ蟲の音もして

六〇 蟲先月

柴の戸をあけてなかむる我庭に

月まつむしのことゑもきこゆる

六一 旅中松蟲

草わけし露の衣手かわかぬに

なほぬらせとや松蟲のなく

六二 夜半蟲聲

長き夜のねさめの友とねやの中に

きくもさひしきこほろきの聲



六三 旅中鹿

たひまくらかりねしつかに夜はふけて

遠山里にを鹿なくなり

六四 浦秋風

江の島の松かけくらく日はおちて

片瀬の浦に秋風そふく

六五 夜時雨

蟲の音もよわりはてたる眞夜中に

木の葉さわきて時雨ふるなり

六六 暮天雁

いつ方をさしてゆくらむ夕暮の

霧たちわたる天つかりかね

六七 歸雁

花かけに心やうつる秋の夜の

月をみすてゝかへる雁かね

六八 初霜

我庭の籬の黄菊色かへて

咲くかともみしはおける初霜



六九 菊

八千草の中にちとせの香をしめて

けたかく匂ふ秋菊のはな

七〇 天長節菊

さき出て、けふにあひぬるうれしさは

御園の菊の香にもしらるゝ

七一 閑居菊

人知らぬ住家に植ゑて世のうさを

露白菊の花をめてまし

七二 野路菊

をしけなく折てはかさす乙女子の

袖もにはへり野邊の白菊

七三 故郷菊

ふる里の野らとなりにし庭の面に

あるしふりてや菊はさくらむ

七四 蔦紅葉

時ならぬ花とや人のおもふらむ

梢にかゝる蔦のもみち葉



七五 夜紅葉

あかぬまに日ははやくれぬ紅葉山

夜の錦を月になかめむ

七六 秋雲

奥山に紅葉やあると来てみれば

また立ちかくす峯の白雲

七七 山家暮秋

山里の秋の暮こそさひしけれ

落葉ましりに時雨ふるなり

七八 初冬

色も香もうつらふ野邊のもゝ草に

しもの花さく冬は來にけり

七九 曉初雪

時ならぬ花ともみゆる曉の

松か枝しろくふれる初雪

八〇 知人の幼兒を殘して身まかり

たるをいたみて

なてしこの花さく時を君またて

かへらぬ旅になといそきけむ



八一 蟲 賣

あはれとも人やきくらむなく蟲の

聲よりほそき老かなりはひ

八二 山 居

山かけのかゝるなかめをちりの世の

人はしらてや日をおくるらん

八三 鏡

かけ見れは頭に霜のます鏡

こゝろはかりはかはらさりしを

八四 述 懐

よしや世の人の鑑にならすとも

曇はかけしおのかこゝろに

八五 寄鏡述懐

いにしへの人のかゝみに照しみむ

わかおこなひのよしやあしやを

八六 折に觸れて

人こゝろへたてはあれといつ方も

おなし匂ひに梅はかをれり



八七 時計

いと細き時計の針のさきにてそ

人をはけますちからありけれ

八八 幼稚園

はくまれ教の庭にかはゆくも

咲きこそ匂へなてしこの花

八九 筆

いにしへのことをつたへて萬代に

のこすも筆の力なりけり

九〇 放鳥

放たれてたちゆく鳥よ心あらは

折になく音の音信もせよ

九一 偶感

尋ね入る文の林の奥にてそ

人のふむへき道はありけれ

九二 戒子

わけのほるふもとの道の多けれは

ふみな迷ひをまつひとあしを



九三 武士

雪と消え花とちりてもものゝふの

名をこそこのせ千代に八千代に

九四 贈出征中之夫

雪霜に雨に嵐にたゆるこそ

常盤の松の操なりけれ

九五 留守之春

我せこかたよりをまつの下かけに

なくさめかほにさける水仙

九六 想夫

千里をもへたつる君に逢ふとみし

夢はうれしきものにそありける

九七 想枕山陣營之夫

大砲の音のきこゆる枕山

いかなる夢をせこは見るらむ

九八 釣魚

川の邊に竿をなかめて暮るゝまで

魚につらるゝ人もありけり



九九 海邊松

千とせへし縁のかけやうつすらん

いそ山松の海にのそみて

一〇〇 述懐

世の中の人のさきにはゆかすとも

まことの道をふみはたかへし

大正五年九月十一日印刷

大正五年九月十五日發行

東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木  
中山谷二百八十九番地

編輯兼發行者 中 館 松 生

東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷者 畠 山 菊 治 郎

東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷所 會社 東京國文社



278  
721



終

